

主 題：あなたは悔い改めたか？

聖書箇所：ルカの福音書 16章19-31節

命 題：悔い改めなければ滅びます。

このメッセージを語るに当たってお祈りをしてくださった皆さん、ありがとうございます。また、いつも教会学校のためにもお祈りしていただき感謝いたします。今、教会学校で子どもたちと一緒にルカの福音書から学んでいます。この福音書の冒頭にもあるように、ルカは綿密に調べ、順序を立てて、宛先であるテオピロを信仰に導くために、この福音書を記しています。問題点、また、原因、解決などわかりやすく時系列でまとめられたのが、このルカの福音書です。私たち教師もテオピロになった気持ちで、この福音書からお話を聞き、またそのことを生徒たちと共有できるのはとても有意義な時間です。生徒たちにもテオピロが聞いたように聞いてほしいと願っています。どうしてイエス様はこの世に来られたのだろう、どうしてイエス様はこのように語られたのだろう、どうしてイエス様は死なれたのだろう？そのような疑問を一つ一つ理解していくことは救いに導かれるだけではなく、イエス様を通して、神様とは一体どんなお方なのか、一体何を大切に思われているのかもよくわかってきます。神様はいつも私たちの心を見ておられます。イエス様も心を読み取られて相手に語っています。あなたはどんな心でその行動を選択しているのですかと。

表面的には正しいように見えても、神様の目から見た時に非難された人々がいます。それがパリサイ人たちでした。彼らの心は神様の方を向いていなかったからです。そんな心について、そして私たち人間が永遠をどこで過ごすのか、それを左右している信仰について、皆さんと一緒にきょうは考えてみたいと思っています。もしこのイエス様を信じるという信仰について、それがただ知識だけのものではなく、心はその扉を開く鍵になっているとするならば、私たちの永遠を左右する人生で最大の分かれ道ですから、そのことをいま一度考えてみたいのです。このメッセージを聞いた皆さんが本当の信仰に立っていることを確信して、ますます信仰の歩みを確かなものとしてくださることを願っています。

〈背景〉

きょうのテキストは、ルカの福音書16章、皆さんもよくご存じのラザロと金持ちの箇所です。テキストを読む前に、まず背景をお話ししたいと思います。イエス様がこのお話をだれに対してされているのか、それはとても大切なことです。16章から1ページ戻っていただいて、15:1を見てください。そこには「さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。」と書かれています。2節を見ると、パリサイ人、律法学者の名前も出てきます。そして16:1に戻っていただくと、同じくそこにいた弟子たちに不正な管理人のたとえを話されています。この取税人やパリサイ人たち、そして弟子たちが同じ集団にいて、お話の対象は違いますが、みな同じようにお話を聞いていたのです。この16:1から始まる不正な管理人のたとえは、この世の富、財産や才能、時間、いのちをだれのために用いるべきなのかという内容が教えられています。このたとえ話の結論が16:13に載っているので、そこに目を向けてください。「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるという事はできません。」と。この不正な管理人の話のポイントは、心の優先順位です。神よりも自分の欲望を第一とするか、自分の欲望よりも神を第一とするかということです。これらの両方に仕えることはできないのです。言い換えれば、自分を喜ばせることと神を喜ばせることは相反していて、あなたは神と自分、どちらを愛しているかが問われているのです。私たちの心

の優先順位は神様か、自分か、どちらに重きが置かれているのでしょうか？私たちの礼拝生活においても、そのことを意識して、そのことを一番に考えて生きていくことは非常に大切なことです。

イエス様が語られたこのお話を一緒に聞いていた金の好きなパリサイ人たちは、14節で「イエスをあざ笑った」とあります。「あざ笑」う、このことばには「だれかに向かって自分の鼻を上げる」という意味があります。お前、何を言っているのだという高慢そうな態度、フンというイメージです。そしてばかにして冷笑している様子が想像できるかと思えます。彼らはお金を愛していました。それだけでなく、彼らは自分自身には罪がないと考えていました。イエスよ、あなたはそうは言うが、私たちには罪がないのだから、ぜいたくしようが、何しようが勝手だろうと。15節でイエス様は彼らに、「イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前で憎まれ、きらわれます。」と言われました。あなた方は人の前で自分を正しいとする者です。しかし、神様はあなたの心を知っていますよと、イエス様は言っておられます。彼らは神を敬っていると口では言いながら、心が伴っていなかった。彼らの心は自分自身の富や名声に向いていました。そのような「人間の間であがめられるもの」、「あがめられる」ということばは、「高貴なもの」とか「尊敬されるもの」という意味です。人間の間で尊敬されるものは、神の前で憎まれ、きらわれますと。「憎まれ、きらわれ」というこの単語は一つの単語です。このことばの意味は「憎むべき」とか「忌まわしい」、「大嫌いな」、「不快な」、そして「偶像や偶像礼拝にふさわしいもの」という意味があります。つまり、これら富や名声を切に求めることは罪であると言われていています。何度も繰り返しますが、彼らの心は神様よりも自分の方に向いていました。彼らの最も愛する者は、神様よりも自分だったのです。

そんな金の好きなパリサイ人に向けて語られたのが、このラザロと金持ちのたとえです。明らかにこのたとえの主人公は、この金の好きなパリサイ人を表している、ある金持ちです。そしてこの箇所は、とても大切な三つの真理を私たちに教えてくれています。一つ目は「心の優先順位」、二つ目「心の優先順位のもたらす結果」、三つ目「死後の行き先を決定づけるもの」の三つです。

では、まず聖書を読んでいきたいと思えます。ルカ16：19－31をお読みします。

ルカの福音書 16章19－31節

「:19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。16:20 ところが、その門前にラザロという全身おどきの貧しい人が寝ていて、:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。:22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しきもだえているのです。:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることができないのです。』:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと

預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

1. 心の優先順位 19-21節

一つ目のポイントを見ていきましょう。一つ目は19-21節、心の優先順位です。ここにはふたりの登場人物が詳細に記されています。ひとりはある金持ちで、もうひとりがラザロです。ひとりひとり見ていきましょう。

・ふたりの登場人物 19節

①ある金持ち 19節

一人目はある金持ちです。あり余る富とぜいたくな暮らし。人々の羨望の的であった金持ちです。ここに記されている二つの衣服に目を向けてください。「紫の衣」と「細布」です。これは私たちが少しお金を出して買えるというような衣服ではありません。大金持ちが買える、そのような衣服でもありません。それどころではなくて、物すごい権威を持って、物すごいお金を持っている人しか着れなかった服のことです。それが2着も出てきます。一つは「紫の衣」です。今の世の中では簡単なことですが、この当時、紫色に染色するのに、貝の内臓から少量取れる紫色の染料を使っていました。この染料は本当にわずかしか取れず、たくさんの貝が必要だったのです。この紫色の服を着られる人、それだけの財力を持った人というのは、ローマ帝国の皇帝か貴族たちでした。それをこの金持ちは持っていたという内容が記されています。「細布」というのはシーシルクというものでできた製品で、同じく貝が関係しています。波に流されないように、糸のような細かい分泌物を出す貝があります。その細い糸を紡いで作ったのがこの「細布」です。非常に高価で、柔らかな繊維でした。また、19節の最後に「毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」とあります。これが金持ちについてのもう一つの情報です。

②ラザロ 20-21節

では二人目、ラザロについても見ていきましょう。彼は生きる希望も失ってしまうような、困窮した生活をしています。彼は金持ちのもとへ助けを求めにやって来ました。金持ちの家の門前に寝ていたとあります。普通は座っていると思うのですが、彼は寝ていた。足も非常に不自由だったと思われ、働くこともできなかったのでしょうか。そして、一番特徴に上がってくるのが「全身おでき」だということだと思います。非常に興味深いことばがここで使われています。「全身おでき」というのは動詞で、受け身の完了形で書かれています。これは「潰瘍で覆われていた」という意味があります。私たちが「潰瘍」と聞くと、胃潰瘍のことを思い出しますが、ひどいやけどのような状態です。彼は表面が焼けただけ、皮膚の皮下組織まで深くえぐれているような状態で全身覆われていたということです。非常に不衛生だったでしょうし、また、感染症などの恐れもあるような状態です。貧乏人でお金もなく、金持ちの食べ残しで生きていこうと思っていたのです。もう一つ出てくるのは犬です。「犬もやって来ては、彼のおできをなめていた」。当時、犬は、私たちの考えているようなペットの犬とは全然わけが違います。非常に忌み嫌われる動物だったのです。ゴミをあさり、死肉を貪り食うような動物です。そのような動物が彼のもとに近寄って来たということは、彼はもう生きていいのか、死んでいるのかもわからない状態だったということが予想できます。当時のユダヤ人社会では、病気や障害は本人やその家族の罪が原因であると考えられていました。つまり自業自得と考えられていたのです。彼は罪人で、天国とは全く無縁だと考えられていたのです。そのような背景がここにあります。

〈疑問〉

もし、そういうことがあったとしても疑問は浮かんでいきますよね。どうしてこんなにお金があり余っているのに、こんな近くにいるのに、ラザロをあわれみ、助けてあげなかったのだろうかということですね。金持ちの二つの豪華な衣服、毎日のぜいたくな暮らしが強調して表しているのは、彼の貪欲さ、そしてあわれみのない心です。人によく見られたい、だれもがうらやむような生活をしたい。困った人を

助けることよりも、まず自分が楽しみたい、そういう金持ちの心の様子をよく表しているのです。金持ちの心はどこを向いていたと思います？イエス様は金の好きなパリサイ人に対し、あなたはまるでこの金持ちのようだとされているのです。

また、ユダヤ人にはモーセの律法があります。人に関する律法を要約すると、あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさいということです。また、旧約聖書の箴言 14 : 21には「**自分の隣人をさげすむ人は罪人。貧しい者をあわれむ人は幸いだ。**」、貧しい人を助けてあげなさいと記されています。聖書は思いにおいても、行いにおいても、神の命令に従わないことはみな罪であると教えています。この金持ちは自分の罪、自分のあわれみのない心に気づいていたでしょうか？イエス様は金の好きなパリサイ人に対して、あなたは自分自身を正しいとしているが、あなたには罪がある。なぜなら、あなたは隣人を愛するという神の命令よりも、自分自身の富や楽しみを優先しているのではないかとされているのです。このように、イエス様が金の好きなパリサイ人にこのたとえを話された訳は、このパリサイ人らの心の優先順位を彼に示し、罪を自覚させるためでした。

〈適応〉

私たちについても少し考えてみましょう。この金持ちと私たちとを比較すると、富の大きさという点では恐らく比較にならないでしょう。また、私たちの家の前には助けを求めてやって来る人はいません。しかし、心の優先順位となると、私たちはとても考えさせられます。私が一番大事にしているのは神様なのか、それとも自分なのか——。あなたを造られた創造主であり、あなたの主権者である神を第一とせず、自分を一番にして生きることは罪です。私の心の優先順位はだれが一番なのだろう？私には罪がないだろうか？考えてみてください。

その罪の結果が次に続く 22 節からの話です。生きていた間、非常に対照的だったこのふたり。そのふたりにも死が訪れました。この世で成功を収めようが、虐げられようが、死はどんな人にも平等に訪れます。いつの日か私にも訪れるし、皆さんにも訪れます。そして死んで終わりではありません。どんな人にも死が訪れ、死後の世界が待っています。死後、人はどこに行くのか？聖書には、私たちとこの世界を造られた創造主の前に連れて行かれ、さばかれることが記されています。ヘブル 9 : 27には「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、」と書かれています。

2. 心の優先順位がもたらす結果 22-31 節

二つ目のポイントは 22-31 節にある心の優先順位がもたらす結果です。ユダヤ人にとって一番の榮譽は、彼らの父祖、信仰の父と呼ばれたアブラハムのいる天国に行くことでした。神を敬い、罪のない人が行くことができる天国。私は父アブラハムの子孫です、私は律法を完全に守ってきたので、私には罪がありません。そう自負する、いや、そう自己暗示に陥っていた金の好きなパリサイ人は、死後必ず天国に行けると信じていました。しかし、そんな彼をたとえた金持ちには悲劇が待っていました。

A. 死後の世界は二通りある 22、23 節

ここに心の優先順位がもたらす結果として描かれているのは二つの場所です。死後の世界は二通りあります。この二つだけしかありません。

①アブラハムのふところ 22 節

22 節に「さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。」とあります。「アブラハムのふところ」ということばが出てきました。ラザロはひとり寂しく死んでいったと思われれます。また、彼は死んですぐに先ほど出てきた犬に死体の一部は食いちぎられたのかもしれないかもしれません。人間としては、余りにも哀れな最期。ラザロの死を見た人たちはみな、こんな死に方だけは絶対したくないと思ったことでしょう。そして金持ちも、ラザロが死んだことを耳にしたことだと思えます。そして、人はいつか死ぬのだな、私もいつか死ぬのだなと気がついたは

ずです。しかし、ラザロは死後、御使いたちによって、「アブラハムのふところ」に連れて行かれました。この「ふところ」ということばは、ことばのとおり「胸もと」です。また、そのほかに「親密な」とか「親しい」という意味があります。お母さんの腕に抱かれている赤ちゃんを想像してみてください。安心して、微笑みを浮かべているような様子。まさにそのことを表現していることばがこの「ふところ」です。天に上げられた信仰の父と呼ばれたユダヤ人の憧れでもあるアブラハムとともにおり、とても温かく親密な関係にある。そのような祝福の場所、天国にラザロはいました。

(2) ハデス 23節

次に、23節にはもう一つの場所が記されています。「その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。」とあります。二つ目に出てくる場所は「ハデス」です。しばらくすると、金持ちも死にました。彼の葬儀には大勢の人が訪れ、きっと豪華な葬儀が行われたと想像できます。ふかふかのベッドで家族に囲まれながら安らかに死んでいったと思います。しかし、死後、彼の身にはとんでもないことが起こります。まさに思っていたのと全然違うことが起こるのです。この「ハデス」は、地獄に落とされる前のさばきを待つ一時的な場所として聖書の中に記されています。地獄とは、永遠の刑罰の場所、燃え盛る火の池です。いわば「ハデス」とは拘置所のような場所、地獄とは監獄のような場所です。どちらも共通して、刑罰に関連している場所です。「ハデス」にいる人はさばきの日が過ぎると、みな地獄へ投げ落とされます。ゆえに「ハデス」と地獄は同義として扱われています。

金の好きなパリサイ人を表している金持ちは自分を正しいとし、天国こそ私にふさわしいと考えていました。しかし、結果として罪人であり、天国など無縁だと考えられていたラザロが天国に行くという逆転劇が起こっています。そのことを通して、イエス様が金の好きなパリサイ人の頑なな目を開こうとしていることがうかがえます。

B. 死後の世界（特に地獄）の三つの描写 24-31節

次に、「アブラハムのふところ」、すなわち天国と、「ハデス」すなわち地獄。聖書が教えてくれる死後の世界、特に地獄について記されている三つの描写を見ていきたいと思います。

①人は消えてなくなる 22-25節

まず死後の世界、特に地獄についての描写の一つ目は、人は消えてなくなるということです。22-25節までそのことが書かれています。先ほども見てきましたが、人は死後、このどちらかの場所に行きます。また、死後も意識や感覚があることがわかります。この箇所「苦しみ」ということばが4回も繰り返し出てきます。聖書に記されている「ハデス」、そして地獄の苦しみは非常にリアルです。金持ちは「私はこの炎の中で、苦しくてたまりません」と叫びました。ここに書かれているように、彼はアブラハムにラザロをよこしてほしいと懇願しています。それも数滴の水欲しさにです。どれぐらいの苦しさか、想像できるでしょうか？私も想像してみたのです。感想としては、そんな少しなら要らないと思いました。つまり、私が現時点で想像できる苦しみなど及びもつかないほどの苦しみや熱さだということです。そんな数滴の水ですら欲しいと思うような苦しみの場所だということです。

また、25節に目を向けると、金持ちか、貧乏人か、生きている間の生活が死後の世界に影響しているようにも見えますが、そうではありません。そうだったら、金持ちは全員地獄、貧乏人は全員天国という話になるでしょう。公正な神はそのようなことは決してなさるお方ではありません。ここで言っているのは、地上で裕福なのは神様に祝福されているからではない。また同時に、地上で苦しんでいるのも神様に呪われているからではないということです。ここに登場するもうひとりの人物はアブラハムですが、アブラハムは大変裕福な人でした。彼は天国に行きました。なぜか——。彼は、神の約束は必ずそのようになるかと神様を信じたからです。この信仰ゆえに彼は義と認められました。神様の前に正しいと認められたということです。その結果、彼は天へと上げられたのです。大切なことは、神様に義と認

められていたかどうかです。裕福かどうかは指標になりません。イエス様は以下のことを金の好きなパリサイ人に悟らせようとされています。金持ちは生きていた間、よいものを受けていました。しかし、彼は神よりも富を愛した。金持ちの心の優先順位は自分が一番だった。かたやラザロは生きていた間、悪いものを受けていました。彼は何も持っていなかったけれども、神を愛した。ラザロの心の優先順位は神様が一番だった。その結果、ラザロは死後慰められました。その結果、金持ちは死後苦しみもだえています。心の優先順位がふたりの行き先を分けているのです。

②行き来はできない 26節

死後の世界の描写の二つ目は26節に書かれています。天国と地獄、それぞれ行き来はできないということです。金持ちがラザロをよこしてほしいと願った時に、アブラハムはこう言っています。こちらとそちらには「大きな淵」があり、行くことができない。この「淵」とは地表の裂け目や谷間のことです。行き来することができないということを表しています。死後、ハデス、地獄に落とされた者は、もう天国に行くことはできません。また、同じように天国に行った人が地獄に落とされるということもありません。死後、この二つの場所にあつて、決して行き来はできないのです。だから私たちは考えなければならないことがありますよね？なおさら生きていた今のうちに、この永遠を左右する分岐点について、もっと詳しく知らなければなりません。

③生きていた間に救いの機会がある 27-31節

三つ目は27-31節に記されている、生きていた間に救いの機会があるということです。27節を見ていくと、金持ちは、私の兄弟もここに来るのか、それはなんてうれしいことなのだろう、なんと楽しいことなのだろうとは言っていない。私は未信者の方に伝道すると、こんなことをよく聞きます。亡くなった父や母、また友たちがいるのだったら私も地獄でいいと。しかし見てください、この状況。金持ちはたったひとりで苦しみもだえています。ハデスは刑罰の場所です。そしてそこには楽しみや安らぎは一切ありません。あるのはただ神の怒りだけです。そこには後悔と孤独、苦しみしかない。それがハデスです。27-28節では、愛する兄弟には絶対にこんな場所に来てほしくないという金持ちの後悔が見て取れます。

そして29-31節を見ると、生きていた間に救いの機会があることがわかります。だから、金持ちはラザロを兄弟のもとへ送ってほしいと懇願しているのです。30節に「彼らは悔い改めるに違いありません」と書かれています。これが鍵です。永遠をどこで過ごすのか、その分岐点となる鍵、それはここに記されている「悔い改め」です。だから金持ちは、アブラハムにラザロを父の家に送って、こんな苦しみの場所に来ないように、よく言い聞かせてほしいと願ったのです。金持ちの兄弟たちもラザロの死をきつと見ていたことだと思います。そんなラザロがよみがえって来たら、その話を聞いたなら、きつと彼らは地獄の苦しみにおびえ、彼の話聞くかもしれない。しかし、その願いはアブラハムによって却下されます。

◎モーセと預言者

続けてアブラハムは言います。「彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。」と。ここにこの悔い改めに導くために神様が準備されていることが記されています。それは「モーセと預言者」です。「モーセ」が表しているものは「律法」です。モーセは神様から律法を授けられ、人々に罪の基準を伝える働きをしました。この律法を通して、私たちは罪を知ります。そして、罪を持っていて、私は神様にさばかれるべき人間だということを知るのです。神様は私たちの行いだけではなく、心の隅々まで、その行いの動機まで読み取られるからです。私にはさばきしかない、どうか神様助けてください。律法を通してこのような思いが起こされるはずで

そんな願いへの神様からの応答が次に記されている「預言者」です。「預言者」が表しているものは「神の救い」です。預言者は神様から救い主が与えられることを預言し、人々に伝えました。罪からの

救い主が私たちに与えられる。その救い主を待ち望み、信じるのが救いへの道であることを彼らは言っているのです。罪の自認と救い主への信仰、また期待、この二つが罪人を悔い改めへと導いてくれます。アブラハムは、この二つの声に耳を傾けなさいと言っているのです。

30節で金持ちは「彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』」と反論しています。それに対してアブラハムは31節で「アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」と返します。この箇所を考えさせられることは、神様の備えてくださった罪と、罪の刑罰からの救いは、あくまで刑罰が怖いから仕方なしに信じるという自己中心的なものではなく、また死人が生き返るなどの不思議なことや恐怖体験があったからでもなく、神様に拠り頼むことが大切であるということです。私たちの心が神様の方を向いていなければ、罪の赦しを得させる悔い改めも信仰も起こり得ません。

しかしながら、この箇所の地獄の描写が恐怖を感じさせるのは事実です。地獄について、これほどリアルに描写されている箇所は、このルカの福音書以外にありません。ここにはっきりと記されているのは、神の救いが用意されているにもかかわらず、それを無視し続ける人々への非常に力強い警告だと考えます。私には罪がないと考える人は、神の救いを絶対に求めません。神はいないと思うし、死後の世界もないと考える人も同じように救いを求めることはあり得ません。しかし、このハデスの恐怖、苦しみを聞くことによって、もしかしたら頑なな心が開かれるかもしれません。だからイエス様はこのたとえを話されたのです。事実、さばきが書かれている箇所には、必ずあわせて神の救いについて書かれています。主イエスは金の好きなパリサイ人、そして今話を聞いている私たちにも、救いを求めてわたしのもて来なさいと言っておられるのです。ラザロと金持ちの行き先を決めたもの、それは悔い改めでした。

〈原因〉金持ちは罪を悔い改め、神に立ち返ることをしなかった！

30節に記されているのは、金持ちの告白ですけれども、ここに記されたモーセと預言者の声に耳を傾けず、自分の罪を悔い改めなかったというこの証言を見落としてはいけません。彼はモーセと預言者の声に耳を傾けなかった。そして自分の罪を悔い改めなかった。だからハデスに行ったのです。もしかしたら、このように考える人もおられるかもしれません。ばかばかしい、天国も地獄もあるものか、人は死んだら消えてなくなるだけだ、いやこの世の行いに応じて、いろいろな生き物に生まれ変わるのだと。いや、全員天国に行くのだ。なぜなら聖書は、神は愛だと言っているのでしょうか。そのように言われる根拠はどこにあるのでしょうか？私は、この聖書のみことばに根拠を置いています。聖書は歴史的にも裏づけられた人が信じるに値する神様のことばです。

3. 死後の行き先を決定づけるもの（悔い改めと信仰） 29-31節

さて、きょうの三つ目のポイントは死後の行き先を決定づけるものです。それは悔い改めと信仰です。これまで悔い改めが非常に大切であることを見てきました。このことばは「後で」ということばと「考える」という二つのことばが合成されてできたことばです。違うように考えること、またそのとおりに後で考えること、すなわち「考え直す」とか「再検討する」という意味を持っています。この聖書では「悔い改め」また「回心」と訳されています。つまり、この悔い改めとは、自分中心の生き方から180度向きを変えて、神様中心の生き方へと心の向きを変えるという意味です。先ほどの心の優先順位と同じだと思いませんか？内容的には同義です。心の変化を表しています。ラザロはアブラハムのふところに行きました。彼は罪を悔い改め、神の助けに期待し、信じ続けた。これは記されていませんが、死後の行き先からも明らかです。彼の肉体は無惨にも朽ちていきましたが、彼の霊は天に上げられ、永遠の慰めを受けたのです。ラザロの名前は「神の助け」という意味を持っています。このたとえ話で重要なことは、どこに心の目を向けているかです。ラザロは神様に目を向けていました。神様はそ

んな彼を文字どおり助けられました。イギリスの神学者、F・F・ブルースは、この悔い改めということばの意味について次のように説明しています。「悔い改め（メタノイア、回心）には、罪から神に立ち返る、心の底からの後悔が含まれます。悔い改めた罪人は神の赦しを受けるのに相応しい状態にあるのです。」、神様、ごめんなさいと、そのような後悔が含まれると。

ラザロと金持ち、死後の二つの永遠の居場所を決定づけたのが、この悔い改めであるのなら、私たちクリスチャンの信じる信仰とも、もちろん関係しています。なぜなら、私たちイエス・キリストを信じる信仰によって罪の赦しを受けることを信じているからです。イエス・キリストを信じる信仰によって、地獄ではなく、天国に行くことができる、そのように聖書に記されているのです。悔い改めと信仰、それは決して別々のものではありません。使徒ペテロも、使徒の働き2：36-38で「:36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」:37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」と語っています。ここでも悔い改めについて語り、その後、「それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」とあります。38節の「それぞれ罪を赦していただくために」の「それぞれ」というのは、救いはあくまであなたとキリストの個人的な関係によって約束されているものだという事です。そして「名によって」ということばの意味は、ぜひとも知っておいてほしいです。これはもちろん、「この名前」という意味もありますが、その名を表す人の権威や人格、命令などすべて含んでいるということです。つまり、イエス様がだれであるのか、またどんなお方だったのか、またどんなことを言われたのか、すべてを信じる必要があるということです。

次に「バプテスマを受け」と書いていましたが、その方についての信仰告白をし、水のバプテスマを受けるということです。水のバプテスマを受けるから救われるのではなく、あくまでも信仰が大切だということです。ここでもこのように悔い改めと信仰が記されています。そしてイエス様をどのように信じるのかも記されています。それは先ほどの「名によって」ということと、36節「神が、今や主ともキリストともされた」の「主」と「キリスト」というこの二つのことばです。「主」というのは「主人」また「神」という意味があります。また、「キリスト」は「約束の救い主」という意味です。イエス様はあなたの救い主というだけではありません。イエス様は主です。イエス様は神です。イエス様を信じるということは、すなわち神に対する全き服従が伴うのです。これは非常に重要なことなのですが、そのような信仰は悔い改めなくしては決して行うことができません。心が自分の方を向いている人が、心の優先順位で自分が一番である人が、どのようにして神に服従することができるのでしょうか？悔い改めなくしては、決してイエス様を受け入れることはできません。またイエス様を正しく信じることなしに悔い改めた生活を送ることもできません。

〈まとめ〉

さて、最後のまとめに入っていきたいと思います。きょうのお話は、イエス様が金の好きなパリサイ人に向かって語られています。私たちにも同じことが言えます。「悔い改めの伴わない信仰」と呼ばれているものがあります。その信仰は、天国行きの切符を手にしながらか、自己中心的に生きることができると言います。イエスを主としなくても、イエスに従わなくても、十字架と復活を覚えていればいいと言います。それはあなたを罪の罰から救い出す本当の信仰ではありません。本当の信仰には必ず悔い改めが伴います。イエスは主です。イエスは神です。神であるイエスから決して目を離してはいけません。まず私たちひとりひとり心の向き、何を一番大切にしているのか、心の優先順位を吟味してくださ

い。本当に大切なことです。聖書に書かれているように、主よ、主よと言いながら、天国に入れない人が大勢いるからです。

また、イエス様をまだ知りませんという皆さん、私たち人間の多くは、神はいないという進化論を信じたり、人が考え出し、人の手で作られた石や金属でできた神と呼ばれるものを信仰したりしています。それは本当にあなたを死後のさばきから救い出すものでしょうか？私たちはまず、創造主に目を向けなければいけません。あなたには造られた目的がある。神は何のために私を造られたのだろうか？私は神の創造の目的に沿って生きているだろうか？創造主を認めなければ、人生の目的も、罪についても知ることがないでしょう。しかし、私たち人間は神の栄光を現す存在として創造されたと聖書に記されています。それを考えた時に、だれひとりとして罪ゆえに目的に沿っていないという現実があります。私たちの心は自分自身に向いていないのでしょうか？罪とは何だったでしょう？それは創造主なる神の目的から外れた生き方、考え方すべてです。神様が求めておられるのは、心から神様を愛する人々です。そんな目的に私たちは沿っているのでしょうか？私には罪があると思われた皆さん、もちろんその罪は創造主に対してのものです。だから、その創造主だけがその罪をお赦しになることができます。その創造主である神が私たちを顧みてくださり、罪と罪の刑罰からの救いを備えてくださっています。それを私たちはよい知らせ——福音と呼んでいます。預言者の言っていた神の救いはもう既に来ています。福音とは、自分が神の前に罪人だと認め、罪を悔い改め、神の備えてくださった救い主イエスを、私の救い主、私の神と信じ従うことです。愛なる神が、私たちが地獄に行くことを望んでいるはずはありません。なぜなら、あなたの救いのために神は人となられ、あなたの罪をその身に背負い、あなたの身代わりに十字架で死なれたからです。あなたを愛するゆえに、神がそのようにしてくださったのです。どうかイエス・キリストをあなたの救い主、あなたの神と信じ従うことによって、その愛にこたえてくださいますように。あなたの罪の赦しは、このお方にかかっています。

既に救われている皆さんの周りにはたくさんの方がいますが、その多くの人はこの永遠を左右する救いを知りません。だれかが語らなければ、この救いの道を知ることはありません。勇気を出して救い主イエスを宣べ伝えていきましょう。